

仙石貢博士を懷ふ、

仙石貢氏は我國土木界の一大人物であつた、荒削の性格まる出しで、少しも頓着する事なかつた。少年時代は土佐の俊敏なる政治家後藤象次郎伯の下に書生となつてゐた。當時後藤氏門下には現在名をなしてゐる大石正己、豊川良平、末延道成などゝ云ふ人がゐて大に後藤伯の訓化をうけてゐた。他の人が政治實業方面に向ふに對し、仙石氏は頭が良く數學に長じてゐたので遂に理學の方へ進んだわけである。何うして土木を選んだかは明でないが、やつぱり土佐の大先輩野中兼山などの人物事業に多少の感化をうけてゐたのであらう。

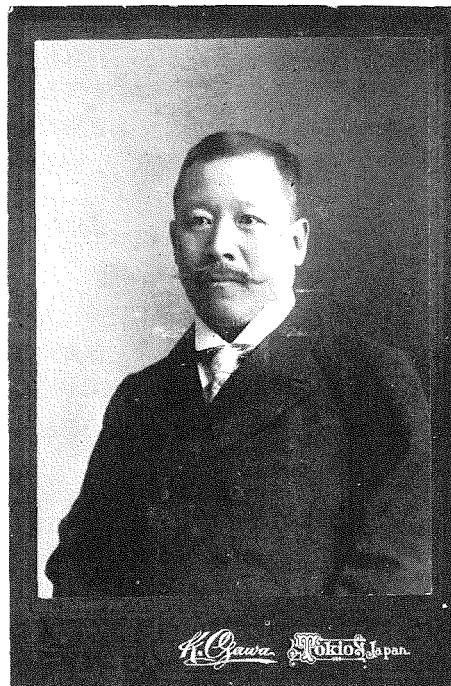
野中兼山氏と廣井勇博士と仙石貢博士の三人は土佐が有する三大技術家である。而して何れも日本の技術的過渡期に於ける大功勞者である。而して三人が各異つた信仰と、共通した熱力とを觀察すると、實に言ふべからざる趣がある。

○

美しき珠玉の性を有し乍らも、遂に自ら之を知る機會を得なかつた仙石氏が、若くして工事現場の野性に共鳴した事は無理ならぬ事である。幸ひ後半生に於て賢夫人を迎へ以來仙石氏の生活は實に一變して來た、而して初めて本來の珠玉の性を自ら發見し得たのであつた。

仙石氏の最後を飾つたものは外務大臣幣原氏が葬儀委員長となつた事でもなく、青山斎場を名士の自動車で埋めた事でもない、死の十六日前に竣工した蘭人技師ドールン氏の銅像であつたらう。諸君は若し猪苗代湖畔に遊ぶの機があつたら、十六橋附近に佇立するドールン氏の銅像を見舞ひ給へ。而してそれが仙石貢氏の晩年に殘した美しき事業であつた事を考へられよ。

○



壯年時代の仙石貢博士（明治四十年）

（那波光雄博士藏）

人情美と單に言ふべく、それは餘りに優美な事業である。若し仙石氏の人情美を追求したならば、友人や部下の不遇を救つた事は物質的にも精神的にも涙ぐましいものがある。酒豪の友人松本爲氏がロンドンに於て客死するや其遺族に對し多大の援助を續けた。舊友間猛馬氏の病没するや、後事を見る事殆ど我が事の如く、間組が今日整然たる組織の下に業界を潤歩し得るもの、實に仙石氏當年の指導良しきを得たからであらう。

日本の鐵道の神、井上勝氏を主義の上では排撃しながらも、日常に關して先輩として禮を失せず、事ある毎に慰問したるが如きは誠に美談と云ふべきである。

○

晩年に至るまで土佐の政客は仙石氏を師父の如く慕つたものである、之は必ずしも政治資金の無心のみではなかつたらしい。仙石氏は元來自己一身を利する黃白には頗る無頓着であつたが、在るに任せては隨分後進に援助